

曾我 英子 (Soga Eiko)

オックスフォード大学 ラスキン・スクール・オブ・アート 博士課程

ON2022 テーマ「ジェンダーギャップ」 感想レポート

この度は、坂口財団様スタッフ、奨学生の皆様とジェンダーギャップについて話し合えることができ、有意義な時間を過ごさせていただきました。女性が向き合わなければいけない社会問題は、女性だけでなく全ての性の人々の問題であると考えています。様々な文化、性別、年齢の方々と意見交換をしながら、話し合うことが大切だと改めて感じることができました。

やはり国によって問題意識、解決方法が様々であるということを印象に持ちました。今回特に興味深かったのは、アジアを中心とした情報を知ることができたことです。日本では、社会問題に向き合う時に、欧米諸国が影響や解決方法のヒントを大きく受けていることをよく感じます。したがって、個人主義を重要視した取り組みになっている傾向がありますが、日本での日常は集団主義が深く根付いているので、個人主義な社会政策を取り入れると、ギャップが生まれます。たとえば、パタニティーリーブが存在していても、実際に子育てのために仕事を休む男性は少ないとよく聞きます。プレゼンテーションの中にもありましたが、結婚した時に選択肢があるものの、女性が男性の名字になる事も同じような背景理由があるのかと想像します。働く女性の数が増えても負担が増すばかりで、公平／平等に繋がる実践的な行動が社会の中で生まれにくくなるのだと思います。もっと日本文化や歴史と深く向き合った、公平を目指した社会文化政策が検討されると良いと思います。

皆さんのプレゼンテーションを拝聴した後に思い出した事ですが、日本の生物学者南方熊楠は、「性というと、男と女の2つの極があるものだと思

われているけれど、本当は両者の中間にこそ真理がある。」

(<http://sauvage.jp/activities/3512>)と発言をしていました。20世紀初等にすでにこのように考えていた熊楠の研究が、その当時から社会の当たり前に浸透していたら、私たちの現在の常識は大きく変わっていたのではないかと思います。またさらに歴史を遡れば、性や社会の中での人の役目は今とはまったく時代がありました。高橋さんにご紹介いただいた文献「骨格から性別二元論」にもありましたが、前進的な考えと共に、過去から学ぶことを怠ってはいけないと再認識しました。すべての人々の個性が尊重され、日々生きがいを感じることでできる社会になるよう、自分の研究や仕事が役に立てるよう邁進してまいります。

以上